

令和8年度
平和大使派遣事業
(長崎・沖縄)
報告書



大 府 市

目 次

・ 事業の概要	1
・ 日程	2
・ 平和大使の紹介	5
・ 平和大使報告書	
長崎派遣	
岳下 結莉	8
深谷 蒼空	10
池田 琴	12
舟橋 咲希	14
近藤 優月	16
松本 和奏	18
戸谷 優都	20
長野 莉々	22
沖縄派遣	
杉 咲来	26
竹中 琉愛	28
棚原 未来	30
天野 彩華	32
石山 渚	34
成田 紗雪	36
坂野 和志	38
石橋龍乃丞	40
和田 理諒	42
廣中 楓	44
石神 智春	46
澤口 那奈	48
・ 平和都市宣言文	50

事業の概要

- 1 目的 次世代を担う若者を「平和大使」として戦争により大きな被害を受けた国内都市に派遣し、戦跡・戦争関連施設の見学、戦争体験者や平和戦跡ガイドとの意見交換などを通して、戦争の悲惨さや平和の大切さを学び、同世代を始め、広く市民に伝えてもらうことを目的とする。
- 2 期 日 ①長崎派遣
令和8年8月8日（土）～10日（月） 2泊3日
②沖縄派遣
令和8年8月19日（水）～21日（金） 2泊3日
- 3 派遣人数 ①8人、②12人
事務局として以下の職員が随行
①地域福祉課職員（2人）
②教育委員会指導主事、大府南中学校長、大府北中学校教諭
- 4 選出方法 広報おおぶ等で募集し、選考会において選出
- 5 対象学年 中学第1～3学年
- 6 報告書 平和祈念戦没者追悼式参列者へ配布するほか、市図書館及び中学校図書室へ設置。市公式ウェブサイトへ掲載

日 程

【委嘱状交付式・事前勉強会】 令和8年6月13日（土）

時間 午前9時30分から午前11時30分まで

場所 市役所2階201～203会議室、大倉公園（桃山町）

内容 市長あいさつ、委嘱状交付、自己紹介、事業説明、事前勉強会
（①愛友会大府支部員による戦争体験講話、②平和関連施設見学
（平和の丘、平和の鐘[市役所敷地内]、防空壕[大倉公園内]））

【事前勉強会】 令和8年7月25日（土）

時間 午前10時から正午まで

場所 市役所2階201・202会議室

内容 安城学園高等学校放送部による取組発表、平和に関する紙芝居を
使った発表、読谷平和パネル見学、派遣先別グループワーク

【長崎派遣】 令和8年8月8日（土）～10日（月）

（1日目）

5：40 市役所集合・出発

6：15 中部国際空港到着

7：20 中部国際空港出発

8：45 長崎空港到着

12：30 長崎原爆資料館見学（平和案内人によるガイドあり）

14：00 青少年ピースフォーラム参加

19：40 宿泊先到着

（2日目）

9：00 宿泊先出発

10：30 平和祈念式典出席

14：00 青少年ピースフォーラム参加

17:15 被爆クスノキ・山王神社一本柱鳥居見学

19:00 宿泊先到着

(3日目)

6:45 宿泊先出発

8:00 長崎空港到着

9:25 長崎空港出発

10:45 中部国際空港到着

12:00 市役所到着・解散

【沖縄派遣】 令和8年8月19日(水)～21日(金)

(1日目)

6:15 市役所集合・出発

7:10 中部国際空港到着

8:30 中部国際空港出発

10:45 那覇空港到着

12:40 ひめゆり平和祈念資料館見学

14:00 沖縄県平和祈念資料館見学

16:30 道の駅かでな

18:00 入村式(読谷村役場)

男女別に分かれ、各民家で夕食(沖縄料理づくり)・宿泊

(2日目)

9:00 宿泊先出発

9:10 チビチリガマ見学

10:00 シムクガマ見学

10:50 座喜味城跡見学

11:30 ユンタンザミュージアム見学

13:50 平和講話及び平和ディスカッション(読谷村文化センター)

16:15 読谷村表敬訪問（読谷村役場）
17:00 男女別に分かれ、各民家で夕食（沖縄料理）づくり→宿泊
（3日目）
8:40 離村式
10:30 首里城見学
13:30 那覇空港到着
15:30 那覇空港出発
17:35 中部国際空港到着
19:00 市役所到着・解散

【事後勉強会】 令和8年8月28日（金）

時間 午前9時30分から正午まで
場所 市役所2階201・202会議室
内容 派遣振り返り、デジタル平和映像視聴、語り継ぐ戦争体験（大府の戦争記録）閲覧、報告書修正

【派遣報告会】 令和8年9月13日（日）

時間 午前9時30分から午前11時30分まで
場所 市役所2階201～203会議室
内容 派遣報告の発表、平和祈念戦没者追悼式の概要説明、「わたしの平和宣言」作成

【平和祈念戦没者追悼式】 令和8年10月4日（日）

時間 午前10時から
場所 市役所地下多目的ホール
内容 献花、「平和に向けたメッセージ」「わたしの平和宣言」の発表

平和大使の紹介

【長崎派遣】

(順不同、敬称略)



岳下 結莉



深谷 蒼空



池田 琴



舟橋 咲希



近藤 優月



松本 和奏



戸谷 優都



長野 莉々

【沖縄派遣】



杉 咲来



竹中 琉愛



棚原 未来



天野 彩華



石山 渚



成田 紗雪



坂野 和志



石橋龍乃丞



和田 理諒



廣中 楓



石神 智春



澤口 那奈

平和大使報告書

長崎派遣

2026.8.8（土）～10（月）



被爆クスノキ前での記念撮影

私の学んだ 3 日間～平和を未来へ～

大府中学校 1 年 岳下 結莉

私たちは 8 月 8 日から 10 日までの 3 日間、長崎で平和学習を行いました。長崎原爆資料館を訪れ、原爆が投下された当時の状況や、その後も長く続いた被害について学びました。当時の長崎市の人口は約 24 万人で、死者は 73,884 人、負傷者は 74,909 人にのぼり、多くの人が犠牲となりました。数字からも、原爆が一瞬にして多くの命を奪ったことが分かりました。

また、被爆者の清野さんから実際の体験を聞きました。清野さんは 8 歳の時、爆心地から約 12 キロメートル離れた深堀村の寺で遊んでいる際に被爆されました。その後、佐賀県へ疎開するため道の尾駅まで歩きましたが、駅には多くの人が集まっており、車内で亡くなる人もいたそうです。さらに、亡くなった方の遺体がトンネルに並べられていたことや、現在でもその場所で気配を感じることがあるという話から、原爆の悲惨さをより身近に感じました。

清野さんは「平和」とは「仲良くすること」だと話してくださいました。身近な人と仲良くすることができなければ、社会全体で仲良くすることもできないという言葉が心に残りました。仲良くする人が増えることで、自分だけでなく、周りの人も幸せに近づいていくのではないかと思いました。3 日間の学習を通して、私は「違い」には良い面も悪い面もありますが、一人ひとりが互いの違いを認め、尊重することが平和につながるのだと感じました。

この平和大使派遣事業では、違う学年や学校の人とも仲良くする

ことができ、少しでも平和に近づく活動ができたと思います。さらに、青少年ピースフォーラムでは、色々な県の人たちと話し、他の人の意見を聞くことで、新しい発見もたくさんありました。現地を訪れたことで、教科書を読むだけでは分からない多くのことを学びました。

戦後 81 年が経ち、被爆体験を直接話せる方は少なくなっています。だからこそ、私たちが被爆者の方の話をしっかり聞き、正確に次の世代へ伝えていくことが大切です。平和大使として、まずはこの活動を多くの人に知ってもらい、自分も平和大使をやってみたいと思う人を増やしたいです。そのために、学校で学んだことを伝え、SNS も活用しながら、友達や同世代の人たちに戦争の恐ろしさと平和の大切さを伝え、行動していきたいです。



青少年ピースフォーラム 意見交換の様子

平和とは

大府中学校 1 年 深谷 蒼空

今回、平和大使として長崎に行き、戦争や原爆についてたくさん
のことを学びました。その中でも、特に心に残ったことが三つあり
ます。

一つ目は、長崎原爆資料館で学んだ原爆の恐ろしさです。原爆が
落とされたときの写真や資料を見て、原爆のエネルギーが想像して
いたよりもずっと大きかったことに驚きました。特に、爆発によっ
てものすごい爆風が起こり、風速が秒速 444 メートルにもなったと
知って、とてもびっくりしました。そんな風が一気にまちを襲った
と思うと、原爆の恐ろしさを感じました。

二つ目は、平和祈念式典に参列したことです。そこで高市総理大
臣が「長崎を最後の被爆地とします。」と話していたことが、とて
も心に残りました。今も世界では大きな戦争が起きています。ま
た、世界には今でもたくさんの核兵器があると知りました。そんな
中で、総理大臣がみんなの前ではっきりと言ったことがすごいと思
いました。本当に長崎が最後の被爆地になってほしいと思いました。

三つ目は、被爆体験者の方から直接お話を聞いたことです。原爆
によって起きた悲惨な体験を聞き、とてもつらい気持ちになりまし
た。また、当時は周りの人たちから「日本は戦争に勝っている。」
と教えられていて、最後になって日本が負けたという本当のことを
知らされたと聞きました。その話を聞いた時、僕は何と言ったらよ

いのか分からないような気持ちになりました。戦争の怖さだけでなく、本当のことを知らないまま生活する怖さもあるのだと思いました。

平和大使として長崎派遣に参加して、行く前よりも戦争や原爆についてもっと知りたいと思うようになりました。今回、自分の目で見たり、実際に体験した方の話を聞いたりしたことを、家族や友達に自分の言葉で伝えていきたいです。そして、この経験を生かして、なぜ戦争が起きてしまうのか、どうしたら戦争をなくすことができるのかを、これからも考え続けていきたいです。



長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典終了後の様子

平和を願って

大府中学校2年 池田 琴

私は、友達と仲良く遊べることに、親と喧嘩すること、ご飯がお腹いっぱい食べられて、安全な水が飲めることは当たり前、そう思っていました。だけど、長崎に派遣されて、その考えはガラッと変わりました。

そのきっかけとなった一つ目は長崎原爆資料館での見学です。原爆が投下された瞬間の映像を見せてもらったとき、私はまるでアニメの映像が流れているようだと思いました。けれど、1945年8月9日午前11時2分に起きた本物の映像だと知り、腕に鳥肌が立ちました。さらに、爆発した瞬間の表面温度は約6,000度で、太陽とほとんど同じ温度だと教えてもらい、とても驚きました。当時の石像が展示されていましたが、その驚異的な熱さにより黒くなっていたり、像の頭が熱風によりなくなっていたりするものも見ました。こんなに頑丈で硬そうな石像でも、たった一発の原爆で黒くなり頭が吹き飛んでしまうほどの威力だということを、その場で見て実感することができました。

二つ目は、平和祈念式典に出席したことです。高市早苗総理大臣、被爆者代表本村チヨ子さん、長崎市長などの話を聞いて、平和を願い、長崎で起きたことをもう二度と起こさせないという思いを強く感じました。

この二つのきっかけを通して、私が思う平和とは何なのかを考えたとき、毎日を笑顔で楽しく過ごしていること、家族や友達が周り

にいて、好きなことや物があること、そういう「普通」のことが当たり前ではなく「とても平和なこと」だと思いました。

今回の派遣で、長崎にはありえないほどの温度の原爆が落ち、たくさんの人がそのせいで亡くなったこと、今もなお原爆で家族を失い苦しんでいる人がいることを知りました。この経験を生かし、友達や家族、身近な人たちに伝え、私と同じように「今生きていることは幸せである」ということを実感し、一日一日を大切に、平和を願って、生きてもらえるようにしたいです。



長崎原爆資料館で平和案内人から説明を受ける様子

忘れてはいけない

大府中学校 2 年 舟橋 咲希

私は今回、平和大使として長崎に派遣されたことで、平和について改めて考える大事な機会となりました。派遣の中で、私は二つのことが特に印象に残りました。

一つ目は長崎原爆資料館です。資料館の中には皮膚が焼けただれていたり、顔や体の一部が、原型が分からないくらい負傷していたりと、思わず目を瞑ってしまうような痛々しい写真がいくつも展示されていて、自分が想像していたよりもはるかに大きな被害があったことに強い衝撃を受けました。原爆の被害を受けた実物を見たり触ったりしたときは、原爆の悲惨さを実感しました。人や物をこんな風にしてしまう武器を人間は作ってしまったんだなと思い、原爆をもう二度と使ってはいけないと強く感じました。

二つ目は、青少年ピースフォーラムです。1日目には、戦時中の疑似体験として、実際に再現した空襲の音を聞きました。人々の恐怖をさらにかき立てるような、耳に残る大きな音に鳥肌が立ちました。2日目には「『違い』っていいこと？悪いこと？」をテーマに、青少年ピースボランティアの学生と平和大使で意見交換をしました。自分とは違う意見もたくさん聞くことができて、新しい発見があり、平和について考える大きな一歩となりました。

私は平和とは「争いが起きず、みんなが毎日少しでも幸せを感じられること」だと思います。私たちは今、好きなものをお腹いっぱい食べられたり、友達と笑い合ったり、人によって幸せと感じられ

ることや幸せの大きさは違うかもしれませんが、生きている中で幸せをたくさん感じていると思います。原爆は一瞬にしてその幸せを長崎の人々から奪っていきました。平和が奪われるのは突然です。誰も幸せにならない戦争は、もう二度とするべきではないと思います。

原爆投下から長い年月が経ちましたが、長崎に原爆が落とされたという事実はこれからも変わらず、忘れてはいけないことだと思います。私は長崎で学んだ原爆のことをまず家族など身近な人から伝えていきたいです。そしてみんなが、毎日のように朝と夜が繰り返されることを当たり前だと思わず、一日一日を大切に生きてほしいです。



青少年ピースフォーラム MY 平和宣言

私の思い

大府中学校3年 近藤 優月

私が今回、長崎派遣で学んだことは生涯忘れることのないものだと思います。こう言い切ってしまうほどに心に残り、たくさんの知識を得ることができました。

原子爆弾が落とされる前の長崎には、きっといろんな人々の思い出の場所、忘れられない風景があったことでしょう。

それがたった一発の爆弾によって全焼し、更地になってしまった。これを悲しむ前に亡くなった人、知ってもなお生きるしかなかった人。

なぜ、生きるために必死だったなんの罪もない国民がこんなにも無惨に殺されなければならなかったのか。

私はこの疑問を解決するため、この派遣事業に参加しました。

私たちは1日目に長崎原爆資料館へ向かいました。入ってすぐ、11時2分に止まったままの被爆柱時計が目に入りました。他にも、辛うじて原型を留め、中のフレームや針が曲がっている置き時計。熱風や熱線などで被害を受けた日用品たち。

爆弾の威力がどれ程のものだったのかを肌で体感し、とてつもない恐怖感に襲われました。

そして同時に強く思いました。「もう二度とこんなものは使ってはいけない。」と。

今の日本にとって平和は当たり前のことであり、戦争は起こらないと思って平和ボケしている人が多いと、実際に長崎に行ってみて

心からそう思いました。

ですが、今この瞬間にも争いが続いている国があることを忘れてはいけません。そして「他人事」と思ってしまっては人として終わりなのです。

これからの時代、被爆体験者の方は減っていくばかりです。

なら、この戦争の話を誰がするのでしょうか。

それは今を生きる若者である私たちです。私たちには戦争体験談を語る義務があります。決して風化させてはならない、大切な役目です。

今回の学びをどう生かすか、私は考えました。

家族や友達に伝えるだけでは、正直何も変わらないと思います。ならどうするのか。それは戦争や平和に関するボランティアに自主的に参加することに加え、今の私にはできませんが、18歳になったら積極的に選挙に参加するなど、自主的に政治に関わっていくことだと私は思います。



山王神社一本柱鳥居

「今あるものを」－未来につなぐ

大府西中学校2年 松本 和奏

「8月9日」長崎に原爆が投下された日。私たちはこの忘れてはいけない日に、平和大使として長崎を訪れました。

1日目、青少年ピースボランティアの皆さんと戦争の疑似体験をしました。そこでまず、自分の大切な物、人、場所を書きました。その後、空襲に遭い、自分の大切な物などは、どんどん失われてしまったといった内容で、疑似体験からは戦争が私たちに与える被害を痛感し、今の生活がどれだけ幸せなのか知ることができました。今、家族と過ごせていること。今、おいしいご飯が食べられていること。今、自分が落ち着く場所があること。それらは当たり前じゃない。「今ある幸せを大切に。」と心に刻まれました。

長崎原爆資料館では、平和案内人の方が、そして被爆体験講話では当時8歳だった清野さんが、丁寧に戦争について説明してくれました。案内人の方は、どうして街が一瞬で変化してしまったのか、資料館にある展示物などを使いながら、私たちでも理解できるように説明してくれました。もっと詳しく学びたいと思いました。清野さんは、自分の悲しくて、辛い記憶を思い出したくないはずなのに、自分の経験したことを語ってくれました。清野さんの顔は、どこか辛そうで寂しそうでしたが、力強く感じました。体験したことを、最大限に伝えるのに一生懸命でした。「被爆の事実を次の世代へつなげるために。」そう感じました。

今回の長崎派遣で今どれだけ幸せに生活できているのか、身に沁

みて感じました。そして、その幸せを当たり前のように感じて生活してしまっていたことを後悔しました。生活の中には辛いこともたくさんあるけれど、命を大切に一生懸命生きようと思いました。「今あるものを大切にして生きていこう。」と。

今回私が体験したことを、みんなにも感じてもらいたいです。ただ、私は戦争の疑似体験をして悲しく、怖く、辛い思いをしました。みんなにはそんな思いをしたり、戦争を実際に体験してもらいたいわけではありません。その時代を生きていた人々のことを知り、全力で命を大切に生きてもらいたいです。

大府市には、戦争や歴史・平和を感じられる場所がたくさんあります。例えば、市役所にある平和の鐘や、大倉公園にある防空壕から感じるができます。これらを見た時に、戦争の悲惨さや平和について思い出してもらいたいです。

そして、今後みんなに意識してもらえよう、学校などでの発表を通じて、平和の大切さを呼びかけていきたいです。



市民の皆様から折り鶴を募って作成した千羽鶴の献納
(国立長崎原爆資料館)

長崎を訪れて

大府北中学校 1 年 戸谷 優都

僕は令和 8 年度大府市平和大使として、長崎に派遣されました。そこで学び、感じたことを伝えたいと思います。

まず、平和大使に応募した理由は、戦争から 80 年以上が経過し、戦争体験者が減少する中で、戦争に対しての意識が薄れていくのではないかという危機感を強く感じたからです。

僕の曾祖父 2 人は戦争体験者です。1 人は兵士として、もう 1 人は衛生兵として、それぞれフィリピンと満州に出兵したそうです。幸い生きて帰ることができましたが、食糧不足や病気が蔓延する劣悪な環境の中で、多くの仲間が苦しみながら亡くなり、この世の地獄を見たこと、生き残ることはできたものの、戦死した仲間に申し訳ない気持ちが強く、多くを語ることはなかったことを祖父から聞きました。

このような経緯もあり、僕は以前から戦争について関心があったので、今回、平和大使に選ばれてとても光栄に思うとともに、平和大使としての自覚を持ち、しっかりと自分の目や耳、肌で感じ取り、学んだことを伝えようと心に誓いました。

長崎では、平和祈念式典に出席し、被爆者代表の方の話を聞くことができました。今は綺麗な長崎の街が、80 年前には、原爆の傷跡を残した焼け野原だったとは、とても信じられませんでした。

また、長崎原爆資料館を見学して、そこで「焼き場に立つ少年」という写真に衝撃を受けました。この写真は、亡くなった幼い弟を

背負い、火葬の順番を待つ少年の姿を撮影した 1 枚です。僕と同じ年頃の少年が弟との最後の別れを前に、たった 1 人でどんな気持ちで立っているのだろうと考えたとき、涙があふれました。こんなことが当たり前に起きていたであろう現実には、ショックを受けました。

他には、青少年ピースフォーラムに参加して、平和についての意見交換をしました。

「戦争をしないことが平和なのか？」

もちろん戦争は悲劇しか生まないので、二度と繰り返してはいけません。一言で言い表すことができませんが、僕は一人ひとりが思いやりを持つことが大切だと思います。小さなことですが、人々が助け合い、思いやりを持ち、協力し合うことで、争いのない、明るく元気な笑顔あふれる未来につながると信じています。

今回、長崎を訪れたことで、より戦争と平和についての意識を持つことができました。この経験を生かして、戦争の悲惨さや平和について、僕なりの言葉で伝えていき、戦争に関心がない人にとっても、少しでも考えるきっかけになれば良いなと思っています。



青少年ピースフォーラム 意見交換の様子

平和な未来のために

大府南中学校 2 年 長野 莉々

1945 年 8 月 9 日午前 11 時 2 分。アメリカ軍が落とした一つの原子爆弾で長崎は一瞬にして焼け野原となりました。建物は崩壊し、木は倒れ、家族や友達、大切な人たちが失われ、建物の中で小さい子どもたちが「母ちゃん、母ちゃん」や「いたい」といううめき声をあげていたそうです。

私は長崎原爆資料館へ行って、たくさんのことを学びました。そこでは、11 時 2 分で止まっている形が壊れかけた時計や、原爆の熱線によって葉っぱの形が綺麗に移された建物の壁などがありました。原子爆弾はとても恐ろしいものです。立ってられないほどの風と、地上から近い位置に太陽が現れたような暑さ、体の細胞をいたずらする放射線や放射性物質。核兵器はこの全てを持ち合わせています。こんなにも恐ろしいものが現在約 1 万 2,000 発もあっていいのでしょうか。

そして平和祈念式典では、たくさんの方のお話を聞き、共通して言っていたのは「長崎を最後の被爆地に」という言葉です。原爆の悲惨さを知っているからこそ、たくさんの方が命が失われた悲しみを知っているからこそ、もう二度と起こしてはいけないんだということを訴えかけるようにお話ししていました。

また、青少年ピースフォーラムに参加し、戦時下を疑似体験しました。紙を何枚も貰い、大切な人やもの、好きなことなどを一つずつ紙に書いていきました。体験している途中で家族や友達などを書

いた紙がだんだんと奪われてしまい、残った紙は一枚もありませんでした。失ってほしくないものまで核兵器によって奪われていく、たった一つの核兵器で失われたものがすごく多いことがわかりました。

「長崎を最後の被爆地に」。今回の派遣を通して私が一番印象に残っている言葉であり、考え深くなる言葉です。平和を望む人々がたくさんいる中で核兵器が存在していることはとても悲しいことだと思います。平和でいるために、今を大切に生きていきたいと思いました。家族や友達に、長崎派遣で学んだこと、得られたものを話し、平和であることの喜び、平和でいるために何をしたらいいのか。そのようなことを伝えていきたいです。そして、伝えて終わりではなく、争いごとを避け、助け合い、支え合っていくことをしっかりと行動に示していきたいです。



長崎原爆資料館で平和案内人から
現在の核兵器保有数に関する説明を受ける様子

沖縄派遣

2026.8.19（水）～21（金）



読谷村教育長と記念撮影をする平和大使（読谷村役場）

平和な未来のために私にできること

大府中学校１年 杉 咲来

私は大府市の平和大使として沖縄を訪れ、ひめゆりの塔やガマ、平和祈念資料館で多くのことを学びました。行く前の私は、戦争を遠い昔の、自分とはあまり関係の無いことだと思っていました。しかし、現地で資料を見たり、当時の話を聞いたりする中で、その考えは大きく変わりました。

特にひめゆりの塔では、女学生たちが病院での仕事を手伝えるために動員され、戦争の中で過酷な状況に置かれていたことを知りました。写真や遺品を見ていると、彼女たちも私と同じように学校に通い、友達と過ごしていたはずなのに、戦争によって当たり前だった日常を奪われてしまったのだと実感しました。もし自分がその立場だったらと想像すると、今の自分の生活も、戦争によって失われてしまうことがあるのだと思い、怖く感じました。

また、民泊先で聞いたチビチリガマについての話も忘れられませんが、今も遺骨が残っていると聞き、言葉を失いました。暗く狭いガマの中で、誤った情報を信じてしまい、追い詰められた末に自ら命を絶つ選択をした人たちがいたことを知り、戦争の恐ろしさを痛感しました。

今、私たちが当たり前のように学校へ通い、家族や友達と笑って過ごせる毎日は、決して当たり前のもではなく、尊い平和の上に成り立っています。戦争体験を聞く機会が減る今、私たちが過去に目を向け、事実を伝えていくことが大切だと感じました。

沖縄から帰った今、今回の経験を自分の中だけで終わらせてはいけないと思っています。戦争を遠い昔の出来事としてとらえるのではなく、今を生きる私たちにも関わる問題として考えていきたいです。

沖縄の美しい海や温かい人々に触れたからこそ、二度と戦争を起こしてはいけないという思いが強くなりました。この思いを忘れず、これからも沖縄のことだけではなく、世界で起きている戦争について学び、平和について考えていきたいです。そして、平和大使として、沖縄で見て、聞いて、感じたことを自分の言葉で家族や友人に伝え、大府市から平和の輪を広げていけるよう、自分にできることを一つずつ行っています。



ひめゆりの塔（ひめゆり平和祈念資料館）

平和な世の中にするために

大府中学校 1 年 竹中 琉愛

私は今、戦争のない日本で生きていて、学校の授業やニュースで戦争は二度と繰り返してはいけないと教えられています。ニュースで見る戦争の映像、教科書で学ぶ戦争の歴史に触れるたびに胸が苦しくなります。

沖縄に行き、実際に戦争で被害を受けた場所、ガマや資料館を見学し、被害を受けた人に関する話を聞くことで、戦争を間近で学びました。ガマは自然の避難場所であり、チビチリガマとシムクガマの二つのガマを訪れました。

チビチリガマはアメリカ軍の捕虜になることを恐れた人が自ら命を絶った場所で、中には今でも遺骨などがあり、立入禁止になっていました。私はその話を聞いて、言葉を失いました。

一方、シムクガマは中に入ることができました。中はとても暗く、懐中電灯で照らしてもあまり明るくなりませんでした。ここには、ハワイに住んでいた英語を話せる人がいたため、米軍と話すことで約 1,000 人の命が助かったことを聞きました。

資料館では、実際に戦争で被害にあった方々の日記のようなものが展示されていました。読むと最後には「戦争は悲惨だ。二度と繰り返してはいけない。」と書かれていました。

戦争に終わりはないのだと思います。戦いが終わっても戦争を経験した人たちの心の傷は消えません。記憶の中でずっと残り続けるのです。戦争によって家族を亡くした人、悲惨な地獄絵図を見てき

た人など、今でも心の傷を持つ人がいます。

戦争を終わらせるのはとても難しいことです。例えば国と国の争いが終わったとしても、戦争が起こる前のような普通の生活はすぐには戻ってきません。戦争を体験した人の心の中では、戦争は本当の意味で終わることはないのだと思います。この言葉の意味が戦争の全てを物語っていると私は思います。平和とは、誰もが恐怖を感じることなく自由な生活を送れることだと私は現地で学びました。

私は少しでも誰もが平和だと思える世の中にするために、身近な人を大切にし、相手の気持ちを考えて行動するところから始めたいです。一人ひとりが思いやりを持てば争いのない平和な世界に近づくことができると思います。今回学んだことを忘れず、これからも平和について考え、自分にできることを続けていきたいです。



ガマ（防空壕として使われた洞穴）の説明（読谷村・チビチリガマ）

対話

大府中学校2年 棚原 未来

私は今回の平和大使沖縄派遣を通して、「戦争の反対語」について学びました。1日目は、ひめゆり平和祈念資料館に行ったことが印象に残っています。そこには、生徒の集合写真がありました。そこに写っているのは私たち中学生と同年代の女の子たちです。同年代だったこともあり、「この子たちが戦争に巻き込まれ、苦しんで亡くなってしまったのかな」と心が締め付けられました。

これは歴史の教科書では学べない、大切な感情です。その先には生徒一人ひとりの年齢、性格、亡くなった原因が書かれていました。戦争の被害者は、どうしても数字で括られてしまいます。ですが、亡くなった一人ひとりに人生がありました。

私は命の重みと戦争の衝撃を胸に、2日目を迎えました。2日目では、実際に人が亡くなった「チビチリガマ」と、全員が助かった「シムクガマ」に行きました。特に印象深いのは、シムクガマの一番奥へ実際に足を踏み入れたことです。道はツルツルした岩場やでこぼこの岩場などがあり、すぐに転けてしまいそうな険しい道でした。

奥の方に行き、全ての懐中電灯を消してみると、手で目を塞いでいるかのように1センチメートル先も見えないほどの暗闇が広がっていました。当時の人はこの暗闇の中、長くて1週間ほど暮らしていたそうです。この光景を実際に体験したことで、当時の人の気持ちが痛いほど分かりました。「もしここに爆弾が落ちて来て命を落

とすなら、せめて明るいところがいい」そう願ってしまうほどの恐怖だったはずです。リアルな恐怖に触れたことで、当時の人になった気持ちで戦争の悲惨さを考えることができました。

私たちはその後、ディスカッションをしました。ディスカッションで一番印象に残っているのは「戦争の反対語」について話し合ったことです。私やグループのみんなは平和が戦争の反対語と言っていました。ですが戦争というのは武力や暴力で国のやりたいことをする一つの手段です。そんな戦争の反対語は「対話」なのだと学びました。世界中の人が優しく対話ができるようになれば、限りなく平和に近づけると思います。

私はこのディスカッションで「対話」について強く学びました。「優しく対話することは、小さい子からおじいちゃん、おばあちゃんまで意識できること。」そんなイメージを持つ人が世界に広がっていけるように、今後も自分の言葉で伝えていきます。



平和ディスカッションの様子（読谷村文化センター）

知ることから始まる平和

大府中学校3年 天野 彩華

私は、この夏、平和大使として沖縄を訪れ、自分が戦争について知ったつもりになっていたことを強く実感しました。私は歴史が好きで、沖縄戦についてもこれまで学んできました。しかし、実際に沖縄のガマに入ったり、資料館を訪れたり、現地の方からお話を聞いたりする中で、私はまだ何も知らなかったのだと気づきました。

特に心に残ったのは、実際に入ったガマの暗さと圧迫感です。懐中電灯を消すと、周りには何も見えず、自分が今どこにいるのかさえ分からなくなるようでした。もしここで生活していたら、死ぬ前にもう一度太陽を見たいと願うと思います。そう考えると、戦争が遠い昔の出来事ではなく、そこで実際に人が生きていたこととして感じられました。

そして、ひめゆり平和祈念資料館では、壁一面に並んだ生徒たちの顔写真を見ました。ひめゆり学徒隊は、日本軍の人手不足のため、看護要員として戦場に送り込まれた少女たちでした。その写真には私より若い女の子もいて、自分と同世代の少女たちが戦争によって命や将来を奪われたことに胸が苦しくなりました。

戦争について学ぶ中では、怖く、重く、目を背けたくなることもあります。それでも、私は怖いからこそ知っておくべきだと考えます。悲惨な過去を知らないままでは、これからの平和と向き合っていくことはできないからです。今の日本で学校に通い、友達と笑い、自由に将来を考えられる生活も、決して当たり前ではありません。

ん。今ある日常が平和によって成り立っていることを、今回の派遣を通して実感しました。

中学生である私たちはこれからの社会を生き、平和を背負う世代です。だからこそ、同世代の人たちに伝えていく役割があります。今回学んだことをどんな些細なことでも伝えて、多くの人が戦争や平和について知り、考えるきっかけをつくることが大切だと考えます。また、平和と向き合っていくためにも、怖がらずに過去について正しい知識を身につけ、学び続けたいです。今ある平和を当たり前だと思わず、一人ひとりが考え続けることが、平和を未来へつなぐ一歩になると思います。



ひめゆり平和祈念資料館でガイドから説明を受ける様子

沖縄で学び考えたこと

大府中学校3年 石山 渚

私は、平和大使として沖縄を訪れました。沖縄は海が綺麗で誰もが一度は行ってみたいと思う観光地です。しかし、本当はその裏に戦争という辛い過去があったことを知りました。そのように感じたのは、ひめゆりの塔とガマを訪れたからです。

ひめゆりの塔を目の前にして、私はここで同じぐらいの歳のかけがえのない命が失われたのだと実感しました。たくさんの花が添えられ、千羽鶴が飾られていました。ひめゆり平和祈念資料館では、沖縄戦で亡くなった227人の生徒と教師の写真が展示されていました。一人ひとりの性格や、当時どのような行動をしていたのかが書かれていました。その場を明るくしようと笑顔でいてくれた人、自分も怪我をしているのにみんなを助けようと治療や食糧の運びをしてくれる人など、強い思いをもって行動した人がたくさんいたことを知りました。

私はそれらを讀んですごく心が痛くなりました。また、「自分だけでも助かりたい」と思うのではなく、誰かのために行動していたことにとても心を打たれました。しかし、もし自分がその場にいたら同じように行動できるのだろうか、どうやって生き延びればよいのだろうか、深く考えさせられました。

次に、チビチリガマとシムクガマを訪れました。チビチリガマでは、アメリカ兵を「鬼畜米兵」と教えられ、恐れていた人々による集団自決が起こり、多くの命が失われました。一方、シムクガマで

は比嘉平治さんと比嘉平三さんという勇気ある2人が米兵と話し、恐れ騒ぐ避難民をなだめ説得して、投降へと導き、約1,000人の避難民の命が助かりました。この出来事から、私は、人々の判断や周りの状況によって、その後の結果が大きく変わることを知りました。

シムクガマには、実際に中に入ることができました。中に入ると、とても暗く思わず目をつむってしまうほど怖く感じました。当時、避難民は十日ほど、この暗く狭い空間で過ごしていたことを聞きました。どれほどの不安や恐怖を感じていたのかを想像すると、戦争の恐ろしさを肌で強く感じました。

今回の派遣を通して学んだ戦争の恐ろしさや平和の大切さを忘れずに、身近な人や次の世代の人たちにも伝えていきたいです。そして、戦争を二度と起こさないために、自分にできることを考えて、行動できる人になりたいです。



ガマ（防空壕として使われた洞穴）の見学（読谷村・シムクガマ）

平和への想い

大府西中学校 1 年 成田 紗雪

「生きて捕囚の辱めを受けず」この言葉には、敵に捕らえられ、痛めつけられたり殺されたりするのは恥であり、国の誇りを守るためにも自決しなさい、という意味があります。戦時中の沖縄では、このような教育が行われていました。その教えを守り、集団自決が行われた場所が読谷村のチビチリガマです。ガマとは、戦時中、住民が身を隠すために使っていた鍾乳洞のことで、読谷村には、生死を分けた二つのガマがあります。中にいた人の約 6 割が亡くなったチビチリガマと、全員が生き残ったシムクガマです。この二つのガマの距離は、約 1 キロメートルしかありません。シムクガマには英語が話せる日本人がいたため、米軍と交渉することができ、中にいた人たちは全員助かりました。一方、チビチリガマでは、米軍がすぐ近くまで来ていることが分かると、教えられていたことを信じ、自ら命を絶つ人が多くいました。同じ地域にある二つのガマは、わずか 1 キロメートルしか離れていないにもかかわらず、生死を分ける結果になったことを知り、戦争の恐ろしさを強く感じました。当時は、敵を信じることを許さない教育が行われていたのだと知りました。

今回私は平和大使派遣事業に参加し、「平和とは何か」という答えを見つけに沖縄へ行きました。沖縄で見たり聞いたりしたことをもとに、自分なりに精一杯考えた結果、平和とは日々の日常に「幸せ」を感じられることだと思います。では、戦争はなぜしてはいけ

ないのでしょうか。それは、何一つ罪を犯していない人々の尊い命が、戦争によって、一瞬にして奪われてしまうからです。今でも沖縄には、米軍基地が数多く残っています。その基地により住民の住む場所が少ないまちもあり、戦争はまだ終わっていないことを実感しました。

戦争に終わりはありません。歴史上で終わっていたことになっていても、大切な人を失った辛い思いは、一生消えません。私はこれから戦争の悲惨さや平和の大切さを、たくさんの人に伝えていきます。そして、今回の平和大使派遣事業で学んだことを忘れず、日々の「当たり前」に感謝しながら生活していきたいです。世界中が笑顔であふれ、誰もが平和に暮らせる日が来ることを願っています。



入村式の様子（読谷村役場）

平和へのリレー

大府北中学校 1 年 坂野 和志

沖縄 2 日目の朝、私は朝早くアメリカ軍の飛行機の音で目を覚ましました。窓の外を見ると戦闘機が飛んでいました。民泊の方に聞いたら「天気の良い日はしょっちゅうだよ」と話してくれ、日頃からたくさんの軍の航空機が飛んでいるのだと感じました。前日に、道の駅からでなから嘉手納基地を見ました。基地は広く、嘉手納町の面積の約 82% を占め、その大きさはディズニーランド 80 個分にもあたることを知りました。ガイドの方からは、基地からの異臭や騒音、事故など様々な問題が多くあり、アメリカ軍の航空機も昼夜を問わず飛行していることを聞き、実際に戦闘機の轟音を体験して住宅など人々の暮らしている身近に軍の飛行機がいることに衝撃を受けました。

今の日本には戦争は無く、平和だと思っていたけれど、沖縄には今もなお基地があり、軍用航空機が飛んでいて人々の生活の隣にアメリカ軍がいます。そんな生活は平和とは言えないと感じました。その基地から戦地に行き、戦争をした戦闘機が近くにいるということに私は怖さを感じました。戦争は終わったと思っていたけれどアメリカ軍の基地問題に悩まされている沖縄の人たちは口々に戦争はまだ終わっていないと話していました。これだけ長い間、人々を苦しめる戦争は決して起こしてはいけないと強く思いました。

そして自然の防空壕であるシムクガマの中に入った時に真っ暗なガマの中で、戦時中はこんなふうに暗くて怖いのだと感じたこと、

自決せざるをえなかった人たちのこと、沖縄で平和について学んだこと、基地と暮らす沖縄の人たちのことを私はずっと覚えていようと思います。

二度と戦争を起こさないために戦争の記憶を風化させないことが大切だと思いました。私はこの平和大使での経験を通して実感した平和の大切さを語り継いでいきます。



嘉手納基地の見学（道の駅かでな）

沖縄戦にふれ、平和を想う

大府北中学校2年 石橋 龍乃丞

私は、派遣の前までは、戦争について、歴史の教科書でしか見たことがなく、「戦争は怖い」「もう二度と起こしてはならない」という考えを持っていました。この考えは、現代を生きる私たちには必要だと思います。この派遣では、さらに戦争と平和について考えを深めることができました。

この派遣では、「沖縄県平和祈念資料館」と「チビチリガマ」が私の印象に深く残っています。沖縄県平和祈念資料館にある展示の一つ、「鉄の暴風」。これは、当時の沖縄戦の際に、3か月間に及んで米軍による空襲や艦砲射撃のすさまじさを表現した言葉です。この鉄の暴風により、沖縄の景観は一変し、多くの兵士・住民が亡くなりました。私は、この展示を見たとき、あまりの悲惨さと衝撃に言葉を失いました。もし、私が当時を生きていて、この光景が広がっていたと思うと、耐えられませんでした。また、沖縄戦経験者の証言からは、当時の住民の、今では考えられないほどの苦しい生活の様子が、文章からも伝わってきました。

チビチリガマは、アメリカ軍を恐れた多くの住民たちが、自ら命を絶つ、集団自決をした場所です。そこにいた住民の中には、自分の母親に「殺してくれ。」と頼んだ少女もいたそうです。犠牲者のお墓として、中には入ることはできませんが、外から見ただけでも、その悲惨さが感じられました。私は、「ガマに隠れていれば、ひとまず安心していただけるのではないか。」と考えていましたが、

この事実を知り、強い衝撃をうけました。

今の沖縄県には、青く、美しい海があります。ですが、ガイドの方からは、祖父が「海が黒かった」と言っていた、というお話を聞きました。これは、「アメリカ軍の船が海を埋め尽くしていた」という様子なのだそうです。戦争は、人々の心を癒す美しい景色までも壊してしまいます。だからこそ、戦争は、人々の命と心を傷つけないためにも、繰り返してはいけないのだと考えます。

この派遣を通して、当たり前にも今の生活を送れている「平和」のありがたさを忘れてはいけなと強く感じました。そして、平和と共に過ごす周りの人にも、この貴重な経験を伝え続けていこうと決心しました。



沖縄県平和祈念資料館での集合写真

沖縄から、サッカーでつなぐ平和

大府北中学校3年 和田 理諒

私は平和大使として沖縄を訪れ、戦争について深く考えるようになりました。沖縄に行く前は、戦争を遠い昔の出来事のように感じていました。しかし、ひめゆりの塔や沖縄県平和祈念資料館を見学し、資料や証言に触れることで、その考えは大きく変わりました。そこには、私たちと同じように友達と過ごし、将来を夢見ていた人たちの生活がありました。戦争は過去の出来事ではなく、一人ひとりの日常や未来を突然奪うものなのだと実感しました。

特に心に残ったのは、ひめゆり学徒隊について学んだことです。彼女たちは私たちと同じ年代の生徒でした。本来なら、学校で勉強したり、友達と笑い合ったり、好きなことに取り組んだりしていたはずです。しかし、戦争によって学ぶ機会を奪われ、看護の仕事させられました。食べ物や薬も十分でない環境で人々の世話をしていたことを知り、戦争の恐ろしさを強く感じました。私は友達と学校生活を送り、大好きなサッカーを続けながら将来を考えています。だからこそ、同じ年代の人たちが夢や日常を奪われたことを想像すると、胸が苦しくなりました。

私にとってサッカーは、単に勝敗を競うだけのものではありません。仲間と声を掛け合い、苦しいときも励まし合います。試合では、チーム全員で考え、協力しなければゴールを決めることはできません。年齢や性格、考え方が違う仲間とも、同じ目標に向かって努力することで心を通わせることができます。また、相手チームや

審判を尊重し、意見がぶつかったときにも話し合って解決することが大切です。私は、こうしたサッカーを通して学んだことが、平和な社会をつくることにもつながると思います。

今回の派遣を通して、平和とはただ、戦争がないだけでなく、互いの命や考えを尊重し、安心して暮らせることだと考えるようになりました。これからもサッカーを通して、仲間を思いやり、相手を尊重し、協力する心を大切にしたいです。そして平和大使として、沖縄で学んだ命の重さや平和への思いを家族や友達に伝えていきたいです。サッカーで仲間とつながるように、日々の生活の中でも人とのつながりを大切にし、自分にできることから平和をつないでいきたいです。



千羽鶴献納（ひめゆり平和祈念資料館）

話せばわかる

大府南中学校2年 廣中 楓

「平和とは、なんだろう。」辞典には、「戦争や紛争がなく、世の中がおだやかな状態であること」と定義されています。しかし、沖縄で学んできた私は、それだけではないと思いました。沖縄で戦争について学ぶ中で、平和がなくなるということは、おだやかな状態がなくなるだけでなく、一人ひとりの命や人生まで奪われることだと感じたからです。

そのことを強く感じたのが、ひめゆり平和祈念資料館でした。沖縄戦で多くの一般住民が犠牲になったことや、ひめゆり学徒隊が227人亡くなったことを知りました。亡くなった生徒や先生の写真や死因を見て、一人ひとりに顔があり、名前があり、それぞれの人生があったことを実感しました。では、この極限状況の中で、多くの命を守ることはできなかったのでしょうか。

そう考え、訪れたのがチビチリガマとシムクガマです。チビチリガマでは多くの人々が集団死に追い込まれた一方で、シムクガマでは、比嘉さんたちが「話せばわかる」と考え、アメリカ兵と交渉したことで、多くの命が救われました。同じ沖縄戦の中で、結果が大きく違ったことから、平和を守るためには、相手と向き合い、対話することが大切なのだと思います。

現在、沖縄戦は終わっています。しかし、今も沖縄では、基地と生活が隣り合い、騒音や排気ガスに悩まされている人々がいます。実際に嘉手納基地を訪れ、戦争は過去の出来事ではなく、今を生き

る人々の生活にも関わっていると感じました。

その現状を知り、改めて「平和とは何か」を考えました。私にとって平和とは、世の中が穏やかなだけでなく、互いの違いを認めながら対話できることです。そのために私は、戦争や平和について探究し、学んだことを周りの人に伝えていきたいです。そして、自分と違う考えをもつ人の思いを知り、対話することを大切にしたいです。

戦争を終わらせることは難しい。だからこそ、始めさせない。そのために、私はこれからも知り、伝え、対話していきます。



平和講話の様子（読谷村文化センター）

平和に生きるということ

大府南中学校3年 石神 智春

平和大使としての沖縄派遣を終え、家に帰ってきて私が最初に口にした言葉は「怖かった」という強い恐怖感でした。派遣の応募作文を書いた際、私は「現地で生の声を聞きたい」「過去の悲劇を風化させない」と強い覚悟を記していました。しかし、実際に現地で耳にした体験者の生の声や語り継がれる過去の悲劇は、自分の想像をはるかに超えて恐ろしくきつく、ただ聞いているだけでも気分が悪くなるほどでした。

現地で目にした展示も、言葉を失うものばかりでした。軍人や民間人の人形は恐ろしいほどリアルで、当時の生活の苦しさや軍人の怖さがひしひしと伝わり、思わず目を背けたくなるほどでした。資料コーナーに足を運ぶと、遺品や撃たれた人々の写真が展示されていました。目の前に広がる悲惨な光景に驚き、恐怖から逃れようと目を背けましたが、そこにも亡くなった人の写真が広がっていました。手足が千切れているものや、苦痛に歪む顔の表情がはっきりと見て取れる写真もあり、白黒写真であるはずなのにまるで鮮血が目の前にあるかのように生々しく映り、怖くて仕方ありませんでした。そして同時に、当時の実際の地獄は写真など比べものにならないほど酷かったのだらうと思い知らされたのです。

しかし、この強烈な恐怖や衝撃を経験したからこそ、気づけたことがあります。今の沖縄には美しい海や賑やかな街並みが広がっていますが、そのすぐ隣には戦争の痕跡や、現代も続く基地問題とい

う現実が存在しています。その対比を目の当たりにし、私は平和という言葉の本質について深く考えさせられました。

平和とは、単に「戦争がない状態」を指すのではないということです。本当の平和とは、誰もが脅かされることなく安心して暮らせ、自分らしく生きられる日常を守り続けていくことなのだと実感しました。平和を築いていくには、まず平和を知ろうとする姿勢を作ることが不可欠です。この現地で感じた「恐怖」と「平和への願い」を忘れず、平和大使として真の平和の尊さを周囲に伝え続けていきたいです。



座喜味城跡の見学

平和を当たり前に

大府南中学校3年 澤口 那奈

「戦争が当たり前の世界」。みなさんは、その世界を想像できるでしょうか。私は今回の沖縄派遣を通して、その世界に一步足を踏み入れるような体験をすることができました。

そして、現地でしか学べないことを五感で感じたいと思い、沖縄派遣に参加しました。参加前の私は、事前学習で戦争の恐ろしさは知ってはいたものの、現地の被害や人々の想いに直接触れる機会はなかったため、沖縄の空気を自分自身で確かめたいと思っていました。

私が派遣の中で特に強く印象に残っているのは「チビチリガマ」と「シムクガマ」の見学です。対照的な特徴を持つ二つのガマのうち、チビチリガマでは国の誤った先導や教育、集団心理により、避難者の過半数にあたる 83 人が集団自決で命を落とす残酷な悲劇が起きました。一方、シムクガマでは相手国の文化に精通した先導者がいたことで、約 1,000 人もの避難者が誰一人犠牲にならず助かりました。

この2つのガマは同じ地域にあるにも関わらず、このように大きな差が生まれました。その差から、それぞれのガマに避難した人の間に距離ができてしまったそうです。

実際にシムクガマの中に入ると、暗く、当時の茶碗の破片などがそのまま残されており、足場の悪さから当時の状況におかれているようで恐怖で体が強張りました。きっと当時は、環境の悪さだけで

なく、恐怖とも戦っていたのだと思うと、私には耐えがたいと思いました。

この体験を通じ、人の知識・経験・行動が時に、命を左右することに繋がることを深く学びました。周囲の状況や偏った意見に流されず、正しい知識を身につけた上で自分の意思で選択することの大切さは、現代を生きる私たちにも通じます。当時は自らの意思で選択することすら困難な時代だったでしょう。しかし、未来を守るために戦ってくださった方々のおかげで、今の私たちの自由で幸せな日常が存在しています。

事前学習だけでは得られなかった多くの気づきがあった今回の派遣で、平和な時代を繋いでくださった方々の存在をあらためて実感しました。この学びを無駄にせず、二度と過ちを繰り返さないために、まずは貴重な経験を家族や学校の友達に伝えます。

そして平和を当たり前と思える世界を守るため、派遣を経験した私たちだからこそできることを見つけ、これからの平和活動に貢献していきます。



離村式の様子（読谷村役場）

平和都市宣言文

緑香るにぎわいの中、子どもたちの笑い声が響き、汗流し働く若者の姿や地域で活躍する元気な高齢者の姿が目映るまち、健康都市おおぶ。大府市は、戦争のない平和な社会のもと、健康都市づくりに取り組み、着実な歩みを続けています。

世界の恒久平和は、人類共通の願いであり、日本国憲法の普遍の原理です。しかし、今なお世界各地で、核兵器の保有、テロ行為、武力紛争などの平和を脅かす様々な問題が起きています。

先人から引き継いだかけがえのない平和のバトンを守り、次の世代の子どもたちにしっかりと渡していくことは、今を生きる私たちの果たさなければならない重大な責務です。私たち大府市民は、一人ひとりの命を大切にし、核兵器、テロ行為などの脅威のない平和な社会の実現を強く訴えます。

日本国憲法の公布から70年目の節目の年に、恒久平和とあらゆる争いのない社会の実現を願い、ここに「平和都市」を宣言します。

平成28年9月27日 大府市



平和都市宣言碑（平成29年9月1日設置）